

# 平成12年度病虫害発生予報 第5号(8月予報)

平成12年7月28日  
津軽地域病虫害防除所  
南部地域病虫害防除所

## 【概要】

水稻では、穂いもち、ごま葉枯病、セジロウンカ、斑点米カメムシ類が全県的に多い、紋枯病、ヒメトビウンカ、コバネイナゴ、ニカメイガが全県的にやや多いと予想される。

りんごでは、リンゴハダニが全県的に、クワコナカイガラムシが津軽地域でやや多いと予想される。

りんご以外の落葉果樹では、ぶどうの晩腐病が県内全域でやや多いと予想される。

畑作・野菜では、きゅうりのべと病が全県的に多い、きゅうりのうどんこ病、ねぎの斑点性病害(黒斑病・葉枯病)、だいこんのキスジノミハムシが全県的にやや多いと予想される。

### 《発生が多くなると予想される病虫害》

水 稻	穂いもち ごま葉枯病 セジロウンカ 斑点米カメムシ類	県内全域
きゅうり	べと病	県内全域

### 《発生がやや多くなると予想される病虫害》

水 稻	紋枯病 ヒメトビウンカ コバネイナゴ ニカメイガ	県内全域
りんご	リンゴハダニ	県内全域
	クワコナカイガラムシ	津軽地域
ぶどう	晩腐病	県内全域
きゅうり	うどんこ病	県内全域
ね ぎ	斑点性病害(黒斑病・葉枯病)	県内全域
だいこん	キスジノミハムシ	県内全域

### 病虫害に関する問合わせ先

	電 話	F A X	E-mail
津軽地域病虫害防除所	0172(52)9500	0172(53)3717	ts-bojo@ags.pref.aomori.jp
南部地域病虫害防除所	0176(23)4290	0176(20)1167	na-bojo@ags.pref.aomori.jp

# 1 水 稲

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
穂いもち	県内全域	早 い	多 い	出穂期が平年より早い。 葉いもちの発生が平年より多い。 8月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
紋枯病	県内全域	-	やや多い	初発生が平年より早かった(7月19日) 前年の発生量が平年並であった。 8月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
ごま葉枯病	県内全域	-	多 い	発生が平年より早く認められた。 7月の発生量が平年よりやや多かった。 8月の気温が平年より高い見込みである。
セジロウンカ	県内全域	-	多 い	7月の飛来数が平年より多かった。 8月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
ヒメトビウンカ	県内全域	-	やや多い	すくい取り調査では平年並に推移している。 8月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
コバネイナゴ	県内全域	-	やや多い	前年の発生量が平年よりやや多かった。
フタオビコヤガ	県内全域	早 い (第3世代 幼虫ふ化 盛期)	平年並	予察灯による第1世代成虫の誘殺時期が、平年より早かった。 6月中旬以降、気温が高く経過している。 予察灯による第1世代成虫の誘殺数が平年よりやや少なかった。 8月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
ニカメイガ	県内全域	-	やや多い	前年の発生量が平年よりやや多かった。
斑点米カメムシ類	県内全域	やや早い (第2世代 成虫)	多 い	予察灯によるアカヒゲホソミドリカスミカメ(以下アカヒゲ)の第1世代成虫誘殺時期が平年よりやや早かった。 予察灯によるアカヒゲの誘殺数が平年よりやや多い~多い。 稲の生育が早く、出穂期が平年より早い。 8月は気温が平年より高く、平年並の見込みである。

## ( 1 ) 防除のポイント

出穂期が大幅に早まっており、7月中に出穂期になるところもあるので防除適期を逃さない

### 《 8 月 の 防 除 作 業 》

7 月 6 半旬	8 月 1 半旬	2 半旬	3 半旬	4 半旬	5 半旬
出穂直前 / 出穂期 / 穂揃期 / 傾穂期					
穂いもち	穂いもち	穂いもち	カメムシ類		
紋枯病 ごま葉枯病 コバネイナゴ ウンカ類 フタオビコヤガ ニカメイガ	紋枯病 ごま葉枯病 ウンカ類 カメムシ類	カメムシ類			

注： 印は必ず防除する。  
印は発生状況に応じて防除する。

#### 【 穂いもち 】

防除は、出穂直前と穂揃期（直前散布後7日目頃）の2回必ず実施する。

穂いもちの発生が多いほ場や抵抗性の弱い品種を作付しているほ場では、穂揃期の5～7日後にも薬剤を散布する。

穂いもちの発生が少ないほ場でも出穂期前後に降雨が続くと、穂いもちが多発することがあるので、防除適期を失ないように注意する。なお、降雨が続くような場合であっても、雨の合間をみて散布する。粉剤は多少降雨があっても散布する。

出穂が長引いた場合、穂揃期に達しなくても出穂直前散布後7日目頃には薬剤を散布する。

#### 【 紋 枯 病 】

通常、出穂直前の1回散布でよい。

例年、発生の多い水田では穂揃期にも散布する。

バリダシン剤、バシタック剤、モンカット剤及びモンガード剤は疑似紋枯病（赤色菌核病、褐色菌核病）を同時防除できる。

#### 【 ごま葉枯病 】

発生の見られるほ場では、出穂直前と穂揃期に本病害にも有効な穂いもち防除剤により同時防除する。

#### 【 コバネイナゴ 】

出穂期前後の農薬散布の際に本種にも効果の高い殺虫剤を含む殺虫・殺菌混合剤を散布し、他病害虫と同時防除する。

本種に効果のある殺虫剤は、オフナック剤、トレボン剤、カルホス剤、バッサ剤及びMR.ジョーカーである。

茎葉散布剤のバッサ剤、オフナック剤、トレボン剤、ジョーカー剤及びこれらの成分のみを含む薬剤で本虫に対する効果が低下している地域があるので注意し、前年まで使用して効果がみられないときは他の薬剤を使用する。

本種は活発に移動・分散するので、広域一斉防除に努める。

#### 【 セジロウンカ 】

7月5半旬にまとまった飛来があり、発生量が多い見込みであるが、全般的には出穂直前または穂揃期の殺虫・殺菌混合剤の散布で他病害虫と同時防除できる。しかし、例年局地的に多発生することがあり、そのような地区では、穂揃後も防除が必要となる場合があるので発生に注意する。

8月上～中旬に飛来し、多発生することがあるので、今後発表する予察情報に注意し、適期防除に努める。

# 【 ヒメトビウンカ 】

発生初期にセジロウンカなどと同時防除するが、スミチオン剤、マラソン剤は本種に対する効果が劣るので他の薬剤を使用する。

# 【 ニカメイガ 】

全般に発生は少ないが、前年の発生が目立ったほ場では、出穂10日前に連続50株 5 か所程度を調査し、被害株率が4 %以上の場合には、出穂10日前と出穂初め～出穂期の2回防除する。被害株率が4 %未満の場合には、出穂初め～出穂期に1回、他病害虫と同時防除する。

# 【 フタオビコヤガ 】

出穂直前又は穂揃期に穂いもち、セジロウンカ、コバネイナゴなどと同時防除する。

# 【 カメムシ類 】

本年はアカヒゲホソミドリカスミカメの発生が多く、斑点米の発生が懸念される。穂揃期とその7～10日後の2回、次のいずれかを散布する。その後も発生が多い場合は更に7～10日後に3回目の防除を行う。

<<斑点米カメムシ類の防除薬剤>>			
農薬名	使用時期	使用回数	備考
アドマイヤー粉剤DL	収穫21日前まで	3 (本田2)	蚕毒
エルサン粉剤 2 DL	" 7 "	3	
エルサン粉剤 3 DL	" 7 "	3	
スミチオン粉剤 2 DL	" 14 "	5 (本田4)	休耕田
スミチオン粉剤 3 DL	" 14 "	5 (本田4)	休耕田
チェス粉剤DL	" 14 "	3 (本田2)	
トレボン粉剤DL	" 7 "	3	蚕毒
バイジット粉剤 2 DL	" 21 "	2	
ベストガード粉剤DL	" 14 "	4	
ランガード粉剤DL	" 14 "	3	
MR.ジョーカー粉剤DL	" 7 "	2	蚕毒・休耕田
エルサン乳剤	" 7 "	3	
スミチオン乳剤	" 21 "	5 (本田4)	休耕田
ディブテックス乳剤	" 14 "	4	
トレボン乳剤	" 21 "	3	蚕毒
トレボンEW	" 21 "	3	蚕毒
バイジット乳剤	" 30 "	2 (本田1)	
パプチオン乳剤	" 7 "	3	
MR.ジョーカーEW	" 14 "	2	蚕毒・休耕田
チェス水和剤	" 14 "	2	
トレボン水和剤	" 21 "	3	蚕毒
トレボンMC	" 21 "	3	蚕毒

注) 蚕毒：蚕毒が強いので注意する。

休耕田：休耕田の斑点米カメムシ類に登録がある。

薬剤散布は水田のみならず、畦畔上にも行い、なるべく広域一斉散布で実施する。

出穂期が近づいてからの草刈りはカメムシ類を水田内に追い込むので少なくとも8月中は草刈りを控える。

アカヒゲホソミドリカスミカメやアカスジカスミカメは割れ粉を選好して加害するため、割れ粉の多い場合は特に注意する。

# 【 その他の病害虫 】

ばか苗病の発生は近年少なく経過していたが、本年は局地的に発生の多いところがある。徒長あるいは枯死した罹病株がみられる場合は、罹病株を出穂前に抜取り、土中に埋めるなど処分して、出穂後の籾への感染を防止する。

長距離移動性害虫であるコブノメイガの飛来は、今のところ確認されておらず、発生量は少ないと見込まれるが、8月上～中旬に飛来し、多発生することがあるので、今後発表する予察情報に注意し、適期防除に努める。

## ( 2 ) 防除上注意すべき事項

当該ほ場の防除対象となる病害虫を見極め、同時防除により効率化をは図る。

いもち病が多発して、散布回数が多くなり、散布間隔も 5 日毎に短くする場合には次の点に注意する。

同一農薬を連用すると、耐性菌が出現する恐れがある。また、同一農薬の散布間隔は、農薬残留の点からも 7 日以上としなければならない。したがって、異なる農薬を組み合わせで防除する。

## 2 りんご

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
斑点落葉病	県内全域	-	平 年 並	7 月の発生量が平年並であった。 8 月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
リンゴコカク モンハマキ	津軽地域	やや遅い (第 2 世代 幼虫発生 最盛期)	平 年 並	フェロモントラップによる越冬世代の誘殺時期は平年に比べやや遅く経過し、誘殺数は平年並であった。
	南部地域		少 ない	フェロモントラップへの越冬世代の誘殺時期が平年に比べやや遅く経過した。 7 月の幼虫発生量が平年より少なかった。 8 月の気温が平年より高い見込みである。
リンゴモンハ マキ	南部地域	平 年 並 (第 2 世代 幼虫発生 最盛期)	少 ない	フェロモントラップへの越冬世代の誘殺時期が平年よりやや遅く経過した。 7 月の幼虫発生量が平年より少なかった。 8 月の気温が平年より高い見込みである。
リンゴハダニ	県内全域	-	やや多い	7 月の発生量がやや多かった。 8 月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
ナミハダニ	県内全域	-	平 年 並	7 月の発生量が平年並であった。 8 月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
クワコナカイ ガラムシ	津軽地域	平 年 並 (第 1 世代 幼虫発生 最盛期)	やや多い	越冬世代成虫の発生時期が平年並であった。 7 月の発生量がやや多かった。

\* その他の病害虫

ギンモンハモグリガは平年並の見込みである。

モモシンクイガは平年並に少ない見込みである。

## ( 1 ) 防除のポイント

### 【 斑点落葉病 】

不要な徒長枝は早めに切り取る。

8 月上中旬にアリエッティ C 水和剤、ベフラン液剤 1,500 倍、ストロビードライフフロアブルのいずれかを散布する。8 月下旬にアリエッティ C 水和剤、ストロビードライフフロアブルのいずれかを散布する。

急増の恐れがある場合は、基準薬剤にポリオキシシン A L 水和剤又はロブラール水和剤を加用する。両薬剤は耐性菌を増加させる懸念があるので、同一薬剤の連続散布は避ける。

< 注意点 >

- ・ストロビードライフフロアブルはスミチオン水和剤、オマイト水和剤、ダースバン水和剤との混用で黄変落葉の恐れがあるので、いずれとも混用しない。
- ・ストロビードライフフロアブルはおうとうに対して、葉に褐変などの薬害を発生させるので、周辺にある場合はかからないように注意する。

【 褐斑病 】

前年に発生が多く、7月下旬に防除しなかった園地では、8月上旬にトップジンM水和剤又はベンレート水和剤を基準薬剤に加用して散布する。これらの薬剤は耐性菌を生じる懸念があるので、本病を対象とした防除ではどちらか一薬剤を選び、年一回の使用にとどめる。

【 ハマキムシ類 】

8月以降、発生が多い場合は果実に接触している葉を早めに摘み取る。  
発生が多い所では、8月上旬頃に防除剤を散布する。7月下旬頃にピレスロイド剤を使用した場合は、8月上旬のハマキムシ防除剤は省略できる。  
コカクモンハマキ防除剤は薬剤抵抗性の懸念があるので、同一薬剤の連続散布を避け、年間の使用回数をできるだけ少なくする。

【 ギンモンハモグリガ 】

発生が多い場合は、幼虫の下垂最盛期の10日～2週間後に有効薬剤を散布する。

【 クワコナカイガラムシ 】

発生が多い場合は、8月上旬に有効な薬剤で胴木洗いを行う。  
第1世代成虫の産卵前（8月中旬頃）にバンドを巻き付け、第2世代卵（越冬卵）のふ化前（ふじの収穫後～翌年の5月上旬）に除去する。  
被害が多く、袋の汚染が多い場合は、8月下旬以降早めに除袋し、被害の軽減を図る。

【 ハダニ類 】

園地を見回り発生状況に応じて適宜ダニ剤を加用する。散布の目安は園地全体で1葉当たりのハダニ成虫数が2個体以上、あるいは寄生葉率が50%以上である。  
ダニ剤は薬剤抵抗性が出やすいので、同一薬剤の連続使用を避け、年1回の使用にとどめる。

< 注意点 >

- ・カネマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用するときは、アリエッティC水和剤を最後に加用する。

### 3 りんご以外の落葉果樹

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
(ぶどう) 晩腐病	県内全域	-	やや多い	前年の発生量がやや多かった。 8月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
(ぶどう) 褐斑病	県内全域	-	平 年 並	前年の発生量が平年並であった。 8月の降水量が平年並の見込みである。

( 1 ) 防除のポイント

ぶどう

【 晩 腐 病 】

園地内の排水や通風を良くし、過湿にならないようにする。

8月上旬にキャンベル・アーリーではストロビードライフフロアブルを、スチューベンではアミスター10フロアブル、ストロビードライフフロアブル又はベンレート水和剤を散布する。

< 注意点 >

- ・アミスター10フロアブル及びストロビードライフフロアブルはスミチオン水和剤又はピラニカ水和剤との混用で薬害の恐れがある。パダンSG水溶液と混用しない。また、大粒種では果粉を損なうので使用しない。
- ・アミスター10フロアブルはりんごの一部品種（あかね、旭、ガラ）に薬害を生じるのでかか

らないようにする。

【 褐斑病 】

樹勢の衰弱している樹に発生が多いため、肥培管理に注意し、適正着果を守り樹勢維持に努める。

8月上旬にストロビードライフロアブルを散布する。

## 4 畑作・野菜

病 害 虫 名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
(す い か) つる枯病	津軽地域	-	やや少ない	7月は発生が見られていない。 8月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
(メ ロ ン) つる枯病	津軽地域	-	やや少ない	7月は発生が見られていない。 8月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
(きゅうり) べと病	県内全域	-	多 い	7月の発生量が平年より多かった。 8月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
(きゅうり) うどんこ病	県内全域	-	やや多い	発生時期の早いほ場が認められている。 8月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
(ね ぎ) さ び 病	県内全域	-	平 年 並	7月の発生量が平年並であった。 8月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
(ね ぎ) 斑点性病害 (黒斑病・葉枯病)	県内全域	-	やや多い	7月の発生量が平年よりやや少なかった。 8月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
(アブラナ科野菜) ヨトウガ	県内全域	やや早い (第1世代 成虫産卵 盛期)	やや少ない	第1世代の卵・幼虫の発生時期は早く、発生量が平年よりやや少なかった。 6～7月の気温が高かった。
(アブラナ科野菜) コナガ	県内全域	-	平 年 並	7月の幼虫・蛹の発生量が平年並であった。 8月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
(だいこん) キスジノミハムシ	県内全域	-	やや多い	7月の成虫の発生量が平年よりやや多かった。 8月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。
(にんじん) 黒葉枯病	津軽地域	-	平 年 並	7月の発生は平年同様認められなかった。 8月は気温が平年より高く、降水量は平年並の見込みである。

## ( 1 ) 防除のポイント

すいか、メロン

### 【 つる枯病 】

連作されている畑や、雨続きで湿度が高い状態が続くと発生が多くなるので注意する。

発生が見られたら、5～7日おきに薬剤を散布する。

耐性菌の出現を防ぐために、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

メロンでは、ポリオキシシンAL水剤の50倍液を病斑部が隠れるように全体に塗布する。

きゅうり

### 【 べと病 】

本年は、例年になく発生が多くなっているため、薬剤防除を徹底するとともに、適切な肥培管理に心がけ、早期からの蔓延を防止する。

20～25℃と気温がやや高く多湿な場合に発生しやすく、特に湿度条件で発生量が大きく左右される。また、成り疲れや肥料切れなど草勢が衰えると発生が助長される。

敷きわらを早めに行い、雨滴の飛散を防ぐ。

発病初期から5～7日毎に、下葉や葉裏にも十分付着するように薬剤散布する。発病が激しい場合には3日毎に散布する。

### 【 うどんこ病 】

一般に、乾燥した条件下で発生しやすく、施設栽培で被害が大きい。

露地栽培では例年8月頃から見え始め、窒素肥料が多いと発生が多くなる。

ブルームレス台の接ぎ木きゅうりは、うどんこ病の被害が激しいので注意する。

被害葉は摘み取り処分し、伝染源の除去に努める。

蔓延すると防除が困難になることから、発病初期から5～7日毎に薬剤を散布し、発生初期からの防除を徹底する。また、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ね ぎ

### 【 さび病 】

夏期に低温多湿が続くと多発する傾向がある。

多発してからの薬剤散布は効果が劣るため、発病初期から定期的に防除を実施する。

アブラナ科野菜

### 【 コナガ、ヨトウガ 】

生育初期に発生すると被害が大きいので、定植時の薬剤防除を徹底する。

コナガ及びヨトウガとも、老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るので、若齢幼虫のうちに防除する。

コナガは殺虫剤による抵抗性がつきやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。

だいこん

### 【 キスジノミハムシ 】

播種時に土壌処理剤を必ず用いる。

多発時には、発芽後にディプテレックス乳剤1,000倍液を10a当たり100リットル散布する。

にんじん

### 【 黒葉枯病 】

多発生になってからでは防除効果が期待できないので、早期発見に努め、発生が見られたら直ちに、7～10日おき位に数回、薬剤を散布する。

降雨が数日続くような場合、発生が多くなる恐れがあるので、予防に努める。

肥料切れした場合に多発しやすいので適正な肥培管理を行う。



＝＝＝＝＝＝＝＝＝病害虫防除ミニ情報＝＝＝＝＝＝＝＝＝

《きゅうり 褐斑病》

前年と同様に本年も定植後から高温が続き、8月の気温も平年より高いと予想されています。このため、前年多発したきゅうりの褐斑病の発生が懸念されます。本病の発生確認に努めるとともに、下記の事項を参考に、防除を徹底してください。

本病は、高温多湿条件下で発生しやすく、降雨が連続すると急激に増加する。

発生が見られなくても、べと病及びうどんこ病等との同時防除に努め、高温多湿条件が続くような場合は、本病を対象とした防除を徹底する。

発生が認められたら、薬剤散布を5～7日間隔で実施し、湿潤な気象条件が続くような場合及び蔓延が予想される場合には、散布間隔を3～5日間隔とする。

過繁茂や成り疲れ、肥料切れによって草勢が衰えると急激に蔓延するので、適正な肥培管理に努める。

発病葉及び老化葉はできるだけ早く摘葉し、ほ場内に放置しない。

きゅうり褐斑病の登録薬剤一覧

適 用 病 害 薬 剤 名	褐 斑 病	べ と 病	う ど ん こ 病	炭 そ 病	黒 星 病	斑 点 細 菌 病	灰 色 か び 病	安全使用基準	
								使用時期	使用回数
ジマンダイセン水和剤								収穫前日	あわせて 3回
ジマンダイセンフロアブル								〃	
ピスダイセン水和剤								〃	2回
ダコニール1000								〃	あわせて 4回
シトラーノフロアブル								〃	
スミブレンド水和剤								〃	あわせて 5回
ゲッター水和剤								〃	
ポリオキシシンAL水和剤								収穫7日前	3回
ベフドー水和剤								収穫前日	3回
ストロビーフロアブル								〃	3回
アミスター20フロアブル								〃	4回

注) 印は、県防除基準に採用されているものを示す。

# － 青森県農薬危害防止運動を実施中 －

運動実施期間 平成12年6月15日～8月14日

〔 農薬を使用する場合は、使用基準を守り、農薬による事故を無くしましょう。また、病虫害の発生予察情報等を参考にしながら、必要最小限の農薬を使用し、環境にやさしい農業を推進しましょう。 〕

農薬散布に当たっては、次の事項に注意しましょう。

## 散 布 前

農薬の容器には、使用方法、使用上の注意などが書かれているので、使用前にラベルをよく読む。

事前に、防除機等を点検整備する。

農薬用マスク、保護メガネ、手袋等の防護具を着用する。

過労や体調が優れない場合は作業をしない。

河川や水道水源等の汚染防止、居住者・通行人・家畜等に被害を及ぼさないよう十分配慮する。

## 散 布 時

散布作業は、風の強くない、朝夕の涼しい時間を選び、2～3時間ごとに交替して行う。

風下からの散布、水稻の病虫害防除の際の動力散粉機（多孔ホース噴頭）の中持ち等はやめ、農薬を浴びることのないように十分に注意する。

土壌くん蒸剤を使用する場合は、薬剤が揮散し周辺に影響を与えないよう風向きなどに十分注意し、被覆を完全に行う。

農薬の散布によってめまいや頭痛が生じ、又は気分が少しでも悪くなった場合には、医師の診断を受けること。

## 散 布 後

作業後は、手足はもちろん全身を石けんでよく洗うとともに、眼を水洗し、衣服を取り替える。農薬は安全な場所に鍵をかけて保管する等、保管管理には十分注意すること。

農薬の誤飲を防ぐため、清涼飲料水の空容器などに移し替えない。

使用残りの農薬を不注意に廃棄したり、不用になった農薬を放置したりすると思わぬ事故を引き起こすことがあるので、その処理に当たっては関係法令を遵守して適正に行うこと。また散布に使用した器具及び容器を洗浄した水は、河川等に流さず、散布むらの調整等に使用すること。特に、種子消毒剤等農薬の廃液処理に当たっては、周辺環境に影響を与えないよう十分配慮した処理を行うこと。

農薬の空容器、空袋等の処理は、廃棄物処理業者に処理を委託する等により適切に行うこと。

8月の病害虫テレホン情報案内

(津 軽 地 域)      電 話   0 1 7 2 ( 5 3 ) 0 0 3 3

月	旬	水 稻	果 樹	畑作・野菜
8	上	出穂直前の病害虫防除	斑点落葉病とハマキムシとハダニの防除	きゅうりの病害虫防除
	中	穂いもちなど穂揃期の防除	斑点落葉病とハダニの防除	にんじんの黒葉枯病防除
	下		斑点落葉病の防除	ねぎの病害虫防除

(南 部 地 域)      電 話   0 1 7 6 ( 2 4 ) 0 0 8 8

月	旬	水 稻	果 樹	畑作・野菜
8	上	8月病害虫発生予報について	8月病害虫発生予報について	8月病害虫発生予報について
	中	穂いもちの防除	りんごの斑点落葉病とハダニの防除	きゅうりの病害虫発生状況と防除
	下	いもち病とコバネイナゴの発生状況と防除	りんごのすす斑病と斑点落葉病の防除	キャベツのコナガ、ヨトウガの発生状況と防除

なお、テレホン情報は、病害虫の発生状況により変更することがあります。